|  |  |
| --- | --- |
| 事例 |  |
| 相談経過の要約 | 高校卒業後、パソコンに興味があるということで、情報処理の専門学校に入学。専門学校では授業について行けずに、補講や個別指導をうけ、何とか卒業をする。卒業後は、求職活動を続けるものの、就職が決まらずに、1年ほど自宅を中心に過ごすようになる。その後、親に促されて、コールセンターやコンビニ等でのアルバイトを行うものの、どれも人間関係や仕事について行けない事を理由に1-2週間ほどで退職をする。本人も仕事への意欲が段々となくなり、アルバイトを探さなくなり、自宅での生活が中心になっていった。自宅では、親の買い物を手伝う、図書館での読書などで外出をしていたが、半年ほどたってからは、外出も減り、昼夜逆転の生活が続いた。そうした生活が2年ほど経過をし、心配した母親が精神科の受診を勧め、そこで「広汎性発達障害」の診断を受ける。診断を受けたのち、本人は「発達障がいというものを初めて知ったが、今までうまくいかなかったのは、自分のせいだけではないということが分かったが、すぐに受け入れられるかはわからない」と話していた。  診断して半年ほど経過した後、本人から「そろそろ自分も仕事をしたい」とのことを病院に相談したところ、病院のソーシャルワーカーの方から相談室を紹介される。相談室での面談で、「働きたいが、自身が無い」「自分がどのような仕事に向いているのかよくわからない」「3年後くらいには仕事に就いていたい」との意向から多機能型事業所(就労移行・B型)を2か所見学・体験を行う。体験の後、本人は、「就労移行では自信が無いが、3年後くらいには就職をしたいのでBの方がよい」ということであったのでまずは多機能型事業所〇〇のB型に所属をし、通所しながら、自信が付いたら就職へ向けて支援を受けることとなった。  実際に通所開始してみると、昼夜逆転の影響や集団場面の緊張等があり、週3日午前中のみの通所日数であった。また、通所時には寝ぐせのまま通所してくる、遅刻をしても、自分からは何も言わず、職員から何かあったのですかと聞くと、「朝バタバタしていました」というだけであった。挨拶に関しても、こちらから声をかけると挨拶するが、自分から挨拶をするということが少なかった。作業では封入詰めや、箱折作業、仕分け作業等の軽作業を中心に行い、作業も休憩を入れながら、本人のペースで行っていた。最初の方ではミスが目立っていたが、職員がミスがあった際に都度教えていくと、徐々にミスが減っていった。さらに事業所で行っている土曜日の余暇プログラムも本人が参加希望するものには随時参加しており、他利用者との楽しそうに会話している様子も見られていた。  事業所に通所して1年ほど経った時に、通所について本人に週3日から週4日に増やしてみないか聞いてみたところ、本人から「家族の買い物を手伝わなくてはならないので難しい」とのことであったので、事業所のサビ管が家族と話をし、家族から本人に「家の手伝いに関しては本人がやらなくてもよい、本人は今は就職に向けて頑張ってほしい」とのことを伝えたので、週1日増やすこととなった。  身だしなみに関しては、事業所で行っている計6回のマナー講座に本人の希望が参加したことによって、徐々に良くなっていったが、遅刻の方は度々あり、遅刻の連絡もないことがあった。事業所での作業については、他の作業も提案したが、本人が作業については今のままでよい、ということであったので、作業は変えずに通所日数を増やして様子を見ることとなった。  　その1年後、事業所に通所してから2年目の時に、遅刻もない状況になり、職員が再度通所をもう1日増やしてみてはどうか提案したところ、本人も自信がついて来たので、週5日午前中のみ通所することとなった。また、本人からも「今の作業自体が十分にできるようになったので、自分もそろそろ就職のことを考えた方がよいと思う。就職に向けて頑張っていきたい」ということであったので、職員の方から「色々な作業を経験してみるのはどうか」との提案に関して、本人も「ぜひやってみたい」との意思を確認し、事業所での様々な仕事を経験する中で、より就職を意識した本人へのアセスメントを行っていく事となった。 |